

## 骨髄に浸潤した固形癌の検討

◎内田 一豊<sup>1)</sup>、川口 由佳<sup>1)</sup>、戸苺 みゆき<sup>1)</sup>、近藤 由香<sup>1)</sup>、山口 育男<sup>1)</sup>  
豊橋市民病院<sup>1)</sup>

【はじめに】骨髄検査は一般的に血液学的異常が見られた場合、骨髄液を採取して血液疾患を確定する検査である。その中には、血液疾患以外に固形癌など骨髄への浸潤の有無を調べる目的でも行われることがしばしばある。今回我々は、当院で骨髄に浸潤した固形癌の出現頻度・細胞形態などを検討したので報告する。

【対象・方法】2011年から2018年の8年間で、当院における骨髄検査4,389件中、骨髄に浸潤した固形癌の18例を対象として、血液算定結果と血液像の出現細胞、腫瘍細胞の量、出現場所、腫瘍細胞の大きさ、腫瘍細胞形態所見について検討した。

【結果】固形癌18例の内訳は、肺癌（小細胞癌）4例、乳癌3例、前立腺癌3例、大腸癌3例、胃癌・膵臓癌・肝細胞癌・神経芽細胞腫・神経内分泌癌がそれぞれ1例であった。血液算定結果は、JCCLS 共用基準値を用い白血球高値は6例で低値は3例、赤血球低値は14例、血小板低値は15例であった。赤芽球出現例は10例であった。血液像で幼若顆粒球出現は16例で、そのうち3例に芽球の出現を認めた。この3例はすべて乳癌症例で、同時に赤芽球も多く出現していた。腫瘍細胞の出現量は、薄層塗抹標本において少数出現は11例、多数出現は5例であった。薄層塗抹標本で少数出現の場合でも圧挫伸展標本に多数出現した症例は5例あった。出現場所は、引き終わりや辺縁出現が14例で、全体に出現が見られた4例は多数出現した症例であった。腫瘍細胞の大きさは、好中球の2倍以下の大きさを示す症例が12例であった。

【固形癌の細胞像所見】乳癌、前立腺癌は

N/Cが高く、小集塊の出現が見られ、結合性が強い所見の小型細胞として認められた。小細胞癌では、小集塊や木目込み細工様の結合性も見られた。しかし、散在性に出現している所見もあり、芽球との鑑別を要する所見であった。肝細胞癌・神経芽細胞腫・神経内分泌癌は、それぞれ特徴の見られる所見が認められた。大腸癌、胃癌では、好中球の2倍以上の大きさを示し、乳頭状集塊で腺様配列が明確に観察されることから腺癌細胞と診断できる所見であった。

【考察】骨髄に浸潤する腫瘍細胞は、悪性リンパ腫が多いが、固形癌浸潤も稀に認められる。今回の検討で固形癌浸潤は、乳癌、小細胞癌、前立腺癌で小型の腫瘍細胞の出現が多く見られた。固形癌でも乳癌や小細胞癌などは全身に浸潤する報告があり、これらの症例は注意深い観察が必要と考えられた。固形癌浸潤では、白赤芽球症が見られるとの報告があるように今回の検討でも数例に認められた。また、貧血と血小板減少も見られ、骨髄の破壊が考えられた。細胞の出現所見は、細胞量は全体的に少なめで、引き終わりや辺縁に出現する傾向が認められ、全体に観察することが必要と思われた。圧挫伸展標本で多くの集塊が出現する症例もあり、圧挫伸展標本の観察も重要であると思われた。

【まとめ】骨髄検査で固形癌の浸潤を疑う場合、塗抹標本全体を観察しながら、血液細胞以外に細胞集塊の出現などを見落とさないように、注意深く観察することが必要であると思われた。

連絡先：0532-33-6111(2224)